

森林経営に関するユフロ国際研究集会を終えて

南 雲 秀次郎 (ユフロ国際研究集会大会議長)

1 まえがき

「経営向上のための森林経営計画—研究とその実践—」というテーマによる森林経営に関するユフロ国際研究集会は、海外19ヶ国49名を含む135名もの研究者や実務家が参加して盛会のうちに終ることができた。この研究集会は、われわれの分野でも今後ますます盛んになる国際研究集会の最初のものとして位置づけることができる。ここで今回の研究集会をふり返りそこで生じたさまざまなことを総括することは意義のあることだと考える。

今回の集会の成果は次の4点にまとめることができるように思われる。すなわち

- Ⅰ) 森林経営に関して世界各地でとりくまれている実践や研究上の諸問題を直接担当者からきくことができたこと。
- Ⅱ) 日本の林業経営の現状やわれわれの研究について世界各国の専門家に直接紹介ができたこと。
- Ⅲ) 海外の多くの専門家との親交を深めることができたこと。
- Ⅳ) 国際会議を開催する上でのさまざまな技術を身につけたこと。

なお、今回この国際集會を成功させたことにより、国内の他の分野の人々に経営部門の総合的な実力を評価していただいたことも予期せざる成果だったと考える。

以上に述べた成果の個々の内容に関しては、本稿のあとに続く報告や事務局長を務めた木平氏の「森林経営に関するユフロ国際研究集会準備・運営の記録」それに、森林計画研究会報合併号に掲載が予定されている外国人発表者の論文の抄訳などを参照されたい。私はここで今回の国際会議を通じて感じとった重要な研究課題について簡単に述べてみたい。

2 森林経営に関する研究課題

現在われわれがとりくむべき研究課題は大きく三種に分けることができる。

第一は森林経営に対してコンピュータを導入する問題である。現在コンピュータを利用する森林経営モデルが多数発表されている。このようなモデリングの研究は今後ますます発展してゆく可能性をもっている。この森林経営モデルには多くのサブモデルが含まれている。したがって、モデリングの研究の発展とは、サブモデルの発展を意味する。例えば、森林情報に関するデータベースをどのようにつくるか。このデータベースを用いてどのように経営計画モデルをつくるか。長期計画や中期計画のシステムをどのように構成するか。数理計画法やシミュレーションをそのシステムの中にどのように組み入れるか。グロスモデルを利用してどのように収穫表をつくるか。また、木材の収穫から木材市場までを含む総合的な経営モデルの研究も発展してゆくことであろう。このような研究の発展は必

然的に森林調査法や林業経済学などの発展を促すことになるであろう。なぜならば、より正確な森林情報を迅速に獲得したり、計画の代替案を適格に評価することが林業経営モデルを有効に利用する上で不可欠だからである。われわれはよりよい森林経営を可能とする計画手法を開発するために好むと好まざるとにかかわらずこのような研究をますます進めてゆかなければならないであろう。

第2の問題は、森林の多目的機能を直接的に考慮しながら森林経営をしなければならない事例が多数現われはじめたことである。経済の発展、可処分所得の向上と余暇時間の増大、都市への人口の集中などに伴って森林レクリエーションや野生鳥獣保護などについて人々の関心がますます高まりつつある。このような森林と一般住民との接触面の拡大につれて森林経営の目的設定には、政治的、社会的圧力がますます強まってきている。

このような状況の下で21世紀にむけて森林をどのように管理してゆくべきかという研究課題はわれわれにとっても重要なものになってきつつある。

第三の問題は地球規模で広がりつつある森林破壊をいかにくい止めこれを復元してゆくかということである。FAOによれば、現在開発途上国を中心として年間約1100万haの森林が消滅しつつある。この問題の解決にはまずこうした地域において政治的、社会経済的な環境の改善が不可欠である。しかしそれと同時に、林業関係者達がこの地域に必要な森林育成技術を開発し、これを現地に適用してゆくことが必要である。われわれの分野には当面、この地域で薪炭林をいかに造成したり改良したりするかと、森林経営組織をどのように確立し、そこに適切な森林経営計画をつくり、これを実行してゆくかというような問題が課せられている。

3 む す び

今回の国際会議で明らかとなったことは、わが国の林業経営の技術や研究の水準が世界的にみて決して他の国々にひけをとらないということである。ただ、われわれのPR不足とか研究成果を海外で発表しようとする積極的姿勢に欠けていたため、必らずしも正当な評価をうけていなかったのではないかと考える。

上述の諸問題に関して今やわれわれは十分な貢献をするだけの実力をもっている。われわれは今回の国際会議での経験をテコにしてこれからは世界の研究者や実務家を直接の相手にして研究や実践をおこなうことが必要であろう。「林業統計研究会の皆さんそろそろ出番ですよ」というのが私の結論である。